

## 京都福音特別集会 聖霊降臨節

## 靈愛

## —使徒行伝第2章1～18節—

1996年6月2日

小池辰雄

捨身の愛の霊 霊体にされる 平伏しの姿 ギリシア語の奥の根源語 霊風霊火 キリストを身ずる 「主さまー」の一言だけ どん底的な人 キリストの根元の気 パウロの回身 キリストと一つになる キリストの捨身の愛 霊の力が人に伝わる 神のわざに読みながら与かる

## 【使徒2】

1 五旬節の日となり、彼らみな一処ひとところに集い居りしに、<sup>2</sup> 烈しき風の吹ききたるごとき響、にわかひたひたに天より起りて、その坐する所の家に満ち、<sup>3</sup> また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえに止まる。<sup>4</sup> 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

<sup>5</sup> 時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、<sup>6</sup> この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合ひ、<sup>7</sup> かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、<sup>8</sup> 如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、<sup>9</sup> 我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジア、<sup>10</sup> フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人——ユダヤ人および改宗者——<sup>11</sup> クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』<sup>12</sup> みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』<sup>13</sup> 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

<sup>14</sup> ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、<sup>15</sup> 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、<sup>16</sup> これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。<sup>17</sup> 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。<sup>18</sup> その世に至りて、わが婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。<sup>19</sup> われ上は天に不思議を、下は地に徴を現さん、即ち血と火と煙の気とあるべし。<sup>20</sup> 主の大なる顕著しき



日のきたる前に、日は闇に月は血に変らん。<sup>21</sup>すべて主の御名を呼び頼む者は救われん』<sup>22</sup>イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給いし能力ある業と不思議と徴とをもて汝らに証し給える人なり。<sup>23</sup>この人は神の定め給いし御旨と、預<sup>あらか</sup>じめ知り給う所とによりて付<sup>わた</sup>されしが、汝ら不法の人の手をもて釘<sup>はりつけ</sup>磔<sup>つな</sup>に殺せり。<sup>24</sup>然れど神は死の苦難<sup>くるしみ</sup>を解きて之を甦<sup>よみがえ</sup>えらせ給えり。彼は死に繋<sup>つな</sup>れおるべき者ならざりしなり。<sup>25</sup>ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在<sup>いま</sup>せばなり。<sup>26</sup>この故に我が心は樂しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望<sup>のぞ</sup>みの中に宿らん。<sup>27</sup>汝わが靈魂<sup>たましひ</sup>を黄泉<sup>よみ</sup>に棄て置かず、汝の聖者の朽果<sup>くちは</sup>つることを許し給わざればなり。<sup>28</sup>汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歡喜<sup>よろこび</sup>を満たし給わん」<sup>29</sup>兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばからず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。<sup>30</sup>即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位<sup>くらい</sup>に坐せしむることを、誓<sup>ちか</sup>いをもて神の約し給いしを知り、<sup>31</sup>先見して、キリストの復活<sup>よみがえり</sup>に就きて語り、その黄泉<sup>よみ</sup>に棄て置かれず、その肉体の朽果<sup>くちは</sup>てぬことを言えるなり。<sup>32</sup>神はこのイエスを甦<sup>よみがえ</sup>えらせ給えり、我らは皆その証人なり。<sup>33</sup>イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞<sup>みきこ</sup>する此のものを注ぎ給いしなり。<sup>34</sup>それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う「主わが主に言い給う、<sup>35</sup>我なんじの敵を汝の足台となすまでは、わが右に坐せよ」と。<sup>36</sup>然ればイスラエルの全家は確<sup>しか</sup>と知るべきなり。汝らが十字架に釘<sup>つ</sup>けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

<sup>37</sup>人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』<sup>38</sup>ペテロ答う『なんじら悔改めて、おのおの罪<sup>ゆるし</sup>の赦を得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。<sup>39</sup>この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者とに属<sup>つ</sup>くなり』<sup>40</sup>この他なお多くの言をもて証し、かつ勧めて『この曲れる代<sup>よ</sup>より救い出されよ』と言えり。<sup>41</sup>斯てペテロの言を聴<sup>き</sup>納<sup>い</sup>れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。<sup>42</sup>彼らは使徒たちの教を受け、交際<sup>まじわり</sup>をなし、パンを擘<sup>さ</sup>き祈<sup>いのり</sup>をなすことを只<sup>ひたすら</sup>管<sup>つと</sup>む。

<sup>43</sup>ここに人みな敬畏<sup>おそ</sup>れを生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。<sup>44</sup>信じたる者はみな偕<sup>すべ</sup>に居りて諸般<sup>すべ</sup>の物を共にし、<sup>45</sup>資産<sup>もちもの</sup>と所有<sup>もちもの</sup>とを売り各人の用に従いて分け与え、<sup>46</sup>日々、心を一つにして弛<sup>たゆ</sup>みなく宮に居り、



家にてパンをさき、<sup>1</sup> 歡喜と真心とをもて食事をなし、<sup>2</sup> 神を讚美して一般の民に悦ばる。斯て主は救わるる者を日々かれらの中に加え給えり。

### 【使徒3】

<sup>1</sup> 昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、<sup>2</sup> ここに生まれながらの跛者かかれて来る。宮に入る人より施濟を乞うために日々宮の美麗という門に置かるるなり。<sup>3</sup> ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施濟を乞いたれば、<sup>4</sup> ペテロ、ヨハネと共に目を注めて『我らを見よ』と言う。<sup>5</sup> かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、<sup>6</sup> ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』<sup>7</sup> すなわち右の手を執りて起こししに、足の甲と踝骨とたちどころに強くなりて、<sup>8</sup> 躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讚美しつつ彼らと共に宮に入れり。<sup>9</sup> 民みなその歩み、また神を讚美するを見て、<sup>10</sup> 彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭と奇異とに充ちたり。

<sup>11</sup> 斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳せつどう。<sup>12</sup> ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力と敬虔とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。<sup>13</sup> アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。汝等このイエスを付し、ピラトの之を釋さんと定めしを、其の前にて否みたり。<sup>14</sup> 汝らは、この聖者・義人を否みて、殺人者を釋さんことを求め、<sup>15</sup> 生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦えらせ給えり、我らは其の証人なり。

### ●捨身の愛の霊

我々の集会なんてものは、私かもしお説教なんかしたら、大間違い。私はあの「宣教」という言葉は嫌いなんだ。キリスト告白です。キリストが乗り移って、キリストの中に自分を投げ入れて、そこからものを言わしめられる。これが我々の集会です。語るも聞くも同じことです。そういうわけで、皆さんも、そうやってじつと腰掛けていらっしやるけれども、みな腰掛けながら、立ち上がって一緒に踊っているような、そういう世界であります。

キリストというひとは正に、

「火を投ぜんために来た」

という、彼自身が火なんだから。その火はもちろん聖霊の火です。

### 「聖霊」

という言葉はむしろ



## 「愛霊」

と言つてもいい。キリストというひとは捨身の愛の霊です。十字架の徴をみて、これが捨身の愛だということ。その十字架上の捨身の愛のキリストは、

「彼らは為すところを知らず。赦してやってください」

と神さまに祈っている。

## 「福音」

という言葉は本当はなにか少し甘つたるい言葉だね。

「霊音<sup>れいいん</sup>」

霊の音なんだ。我々はキリストの霊音を受けとる。火なんだ。とにかく、燃えていなければだめだ。燃えざるを得ない。キリストは火を投ぜんために来た。

「どうぞ、燃やしてください」

と。その火は聖霊の火です。だから、愛の霊です。「聖霊」なんて、なにかもったいぶつたような名前ではない。キリストの愛の霊です、捨身の愛の霊です。

## ● 霊体にされる

生まれつきの我々は「肉」という。

「肉で生きるな、霊で生きろ」

とは、

「生まれつきの自分で生きてはだめだ、キリストの霊で生きろ」

ということ。パウロが、

「いの世を過ぎたら霊体をいただく」

と言っているけれども、我々は既に霊体にされている。本質的には我々は霊体なんだ。肉体ではない。キリストの霊を宿しているのは、我々は霊体なんだ。相対的な生と死をもう既に乗り越えてしまっている。死なないんです。霊体は永遠の生命だから。相対的な現象として肉体はだめになっても、その次に霊体となって先の世界に進んでいく。

キリストも正にそうだった。復活したキリストは四十日間、方々に顕れて語っておられる。さらに十日を加えて、五十日目に聖霊を降だした。だから、「五旬節」なんていう言葉ができた。

「四十日間、弟子たちに顕れて語った」

と書いてあるでしょ。そして、

「永遠に、世の終りに到るまで、我は汝らともにあり。汝らのうちにあり」

と仰った。

「共に」というのは旧約の世界だ。新約の聖霊は「中に」の世界です。中に入ってください。キリストが私の中に、あなた方一人一人の中に入ってください。

「我を見よ、わがうちなるキリストが見えないか」



ということをおなた方一人一人が告白できる。それが本当のクリスチャンなんです。

「キリストを信じている」

のではない。

「私はキリストを信じていません。私は、キリストが中にいらつしやるから、信ずる必要はありません」  
と、それでいいんだ。信じ仰ぎみていたつてだめだ、中に入らなくては。

昔の無教会は、聖霊内住のそういうもの凄い世界からやはり次元的にずれていたね。

「教会は形式的だから、無教会だ」

なんて言い出した。そんなのはだめだよ。そんなこととして、相対的な判断したつてだめなんだ。

### ●平伏しの姿

我々は、姿はなにかというと、平伏<sup>ひれふ</sup>しなんです。デユラーも描いているように、キリストも父なる神さまの前に平伏して祈つておられた。そういうぶつ倒れの姿です。それが本当に立たしめられる。キリストはゲッセマネの園で平伏して祈つておられた。我々も平伏しの姿が一番本当なんです。そうすると、いつなんどきでもキリストは立たせる。そして、戦わせる。それが証者です。パウロも、

「福音は言葉にあらざり力なり」

と言つたでしょ。力の世界であつて、言葉の意味の世界ではない。音の世界、力の世界です。霊楽<sup>いんがく</sup>です。ベートーヴェンの音楽もこの霊楽にはかなわない。

地上では我々は未完成です。完成したらおしまいです。

「完成したらそれでお終い」

ということだからね。「未完成」ということは限りなく進むということです。地上の生涯は序曲<sup>しよきょく</sup>にすぎない。本曲は向こう側に行つてからです。我々には天国篇<sup>てんごくへん</sup>が待っている。地上はその序曲です。そういうのが限らない自由をもっている。

自由というのは愛の自由です。勝手気儘ではない。今の日本人の民主主義なんてだめだ。私は「民主主義」というのは躓きの言葉だと思つている。民主ではない。神主<sup>かみぬし</sup>なんだ。神が主になつてないと、

「アンダー・ゴッド」(神の下)

でないのだめなんだ。この「アンダー・ゴッド」という言葉を日本の民主主義は持つていない。とにかく、日本は精神的に情けない。精神的に一番日本はだめなのではないかな。

「ああ、キリスト教は」

なんて言つて、キリスト教をどこかよその宗教だと思つている。そうではない。キリスト教は——教ではない、道です——キリスト道は世界の宗教なんです。お釈迦さんだつてキ



リストにはかきませんよ。大変なひとです、イエスというひとは。いつまでも在りて在りたもう主です。

### ●ギリシア語の奥の根源語

口語訳の聖書で、

「……であろう」

という訳がある。私はああいう訳は大嫌いだ。気がぬけてしまうから。「であろう」ではない。みな

「……である」

と、将来のことも全部、現在形で書いて差し支えない。福音の世界は永遠に現在の世界だから。永遠を背景としたところの現在です。私はもつと大胆な新約聖書の訳を書きたいと思っているくらいです。ギリシア語になんかにこだわらない。ギリシア語の奥の根源語を霊で視て書く。単なる訳ではない。そういうのを書きたいと思っている。

「それは文法的には違うではないか」

「文法的には違うさ、あたりまえだ」

とはつきり言つてやる。妙な、重箱の隅をほじくるような、そんな学問はだめだよ。学問は、やはり神の霊がその背後になれば本当の学問ではない。

キリストの霊が宿っている人の言葉は単なる言葉ではない。単なる意味ではない。力なんだ、生命なんだ、光なんだ。そういうのが日本では本当に少ないだろうね。困ったもんだな。そこへいくと、ヨーロッパとかアメリカとか、キリスト道の歴史的伝統のある国は違ふと私は思うね。

どうぞ、皆さん一人一人は天下、一品ですから、キリストの存在的な証者としていよいよ楽しく勇ましく進んでください。

### ●霊風霊火

使徒行伝2章に入ります。

1五旬節の日となり、彼らみな一処ひとところに集い居りしに、2烈しき風の吹きき

たるひびきごととき響ひびき、にわかひびきに天より起おこりて、その坐する所の家に満ち、これは凄いね。たった二節だけでも、この節だけをじーつとその文字の現実を見ていたら、グーツとこちらに風がくる。霊の風がくる。凄い現実ですね。

3また火の如きもの舌のように現れ、分かれて各人のうえおのに止まる。

聖霊の現象です、聖霊の火です。これがキリストが仰つた、

「われ火を投ぜんために来た」

という火です。霊火です。



4 彼らみな聖霊に満たされ、御霊の宣べしむるままに異邦の言にて語りはじむ。

自分の知らない言語を言えるようになってしまった。これは不思議なことです。だから、みなびつくりしてしまった。

5 時に敬虔なるユダヤ人ら天下の国々より来りてエルサレムに住み居りしが、6 この音おこりたれば群衆あつまり来り、おのおの己が国語にて使徒たちの語るを聞きて騒ぎ合い、7 かつ驚き怪しみて言う『視よ、この語る者は皆ガリラヤ人ならずや、8 如何にして、我等おのおのの生まれし国の言をきくか、9 我等はパルテヤ人、メヂヤ人、エラム人、またメソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ、10 フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む者、ロマよりの旅人——ユダヤ人および改宗者——11 クレテ人およびアラビヤ人なるに、我が国語にて彼らが神の大なる御業をかたるを聞かんとは』12 みな驚き、惑いて互に言う『これ何事ぞ』13 或者どもは嘲りて言う『かれらは甘き葡萄酒にて満たされたり』

14 ここにペテロ十一の使徒とともに立ち、声を揚げ宣べて言う『ユダヤの人々および凡てエルサレムに住める者よ、汝等わが言に耳を傾けて、この事を知れ、15 今は朝の九時なれば、汝らの思うごとく彼らは酔いたるに非ず、16 これは預言者ヨエルによりて言われたる所なり。17 「神いい給わく、末の世に至りて、我が霊を凡ての人に注がん。汝らの子女は預言し、汝らの若者は幻影を見、なんじらの老人は夢を見るべし。18 その世に至りて、わが僕・婢女に、わが霊を注がん、彼らは預言すべし。』

### ●キリストを身ずる

「霊」とか「聖霊」とか言いますが、何よりも我々自身があるがままにキリストの中に自分を投げ入れなければ。キリストの中に投身する。キリストを信ずるのではない。もし「信ずる」というなら、

「身ずる」

と書いたらいい。投身してキリストと一つになる。キリストの前にぶつ倒れる。そして、キリストの中に、

「主さまー」

と言って自分を投げ入れる。私の祈りは簡単なんです。「主さまー」と、身体の奥で叫ぶんですよ。そして、キリストの中に自分を入れてしまふんです。そしてあとは、

「ありがとうございます、アーメン、ハレルヤー！」

です。「主さまー」と一言いっただけで、自分を投げ入れるんです。言葉ではない。叫びそ



のものがキリストへの投身なんです。これは本当ですよ、私はそういう祈りをする。あとは何も言うことはない。キリストと一つになると、あとは、

「アーメン、ハレルヤ。ありがとうございます」

だけ。グーツともの凄い力がくる。私は疲れをしない。

「ああ、今日は疲れた」

なんていうことはない。私は歳なんか超越しています。92歳だって、何歳だっていいよ。私は歳なんかありません。

### ●「主さま！」の一言だけ

イエスという方はありがたい方で、大変な方です。私は

「主さま！」

という一言、全身で音のしないところの叫び、内なる叫びだけです。それであとは

「アーメン、ハレルヤ！」

だけ。キリストの中に入ってしまう。叫ぶと共にキリストの中に入ってしまったているから、本当にもの凄い力がくる。だから、疲れをしない。何か仕事をしようと、あるいは、書こうとしたって、「主さま！」一言でいい。グーツと、キリストの中に入ってしまったら、大変なことだ。キリストの中に一つにされる。

「われ汝のうちに、汝わがうちに」

という世界に入ってしまう。そういう簡単な祈りなんだ。他に何も言うことはない。私の祈りはただ「主さま！」の一言だけです。こんな簡単な人間は一体いるかね。あなた方も簡単になつてくださいよ、楽だから。もう力が来てしょうがないんだ。疲れを知らない。眠くはなるよ。五、六時間眠ればたくさんだ。

あなた方お一人一人が本当にこの霊人にならなかつたら、つまらないですよ。霊の人になるためには、もう一つの根底がある。それは本当に十字架を受けとることです。キリストの十字架の贖いの愛、これを本当に受けとる。

そして、キリストを冥想していると、あの復活のキリストに——これは霊のキリストですから——でつくわすわけです。そうしたら、聖霊のバプテスマを受けてしまう。十字架が土台になつてないと、本当の聖霊のバプテスマはこない。ヘタするとサタンの霊にきりかわってしまう。

「自分が霊的になつた」

なんて思ったら大間違い。聖霊は私する世界ではない。無限無量の愛の霊です。私たちを助け、活かし、キリストの霊で満たすのは、人にこれを伝えるためです。我々がいわゆるおめでたくなるわけではない。人に伝えなければ、存在が伝道でなければ、聖霊を受けたということにならない。



## ● どん底的な人

その聖霊を受けた人は本当にどん底的な人です。

「さいわいなるかな、霊の貧しき者」

なんです。

「自分を何ものともしない」

ということが

「霊が貧しい」

ということですよ。その霊が貧しい、自分を何ものともしない者にキリストの霊が働きたもう。そして、それはひとに、その人を通してキリストを伝える。キリストの生命を与える。すべて具体的なんです。観念ではない。感情ではない。本当に人助けをする。内容はいろいろです。それが本当の愛です。具体的に人助けをしなければ、愛なんて言ったってだめなんです。

「友のために生命を棄つる、これより大なる愛はなし」

という捨身の愛なんだ。この捨身の愛の存在が本当にキリストの霊をいただいている人なんです。キリストの霊をいただいている人は捨身の愛の存在なんだ。

キリストは我々一人一人のために生命を棄てられた。贖いの仕事をされた。しかも、復活して四十日間現れていろいろな人に語られた。あとまた十日間で五十日目（ペンテコステ）に聖霊降臨となった。それから、世の末にいたるまで、今もなおキリストは働きたもう。霊界に生きて、我々が

「主さまー」

と言えなくても応えてくださる。

「私はお前をこんなに呼んでいるのに、聞こえないか」

と、むしろ上から本願の声と呼んでいる。この本願の声に応ずるのが、「主さま！」ということ。こちらの叫びなんだ。叫びの前に本願の言葉がきているわけです。

そしたら、力がくるですよ。

「言にあらざ、力なり」

とパウロが言ったのはそのことなんだ。力であり、生命なんだ。だから、我々は動かざるを得ない、やらざるを得ない。ヒルティも『眠られぬ夜のために』の中で言っている、

「止むに止まれないでやるのが本当だ」

と。

## ● キリストの根元の気

霊的な精神的な歴史というものは、或る時期があるね。ソクラテス、プラトンが出た頃、孔子や老子が出た頃。



日本の教育も、人物教育をしなければだめだよな、知的な教育ばかりしていたんでは。人物をつくらなければだめなんだ。知的なものは本を読めばできる。ところが、ただ本を読んだだけではできないこと、直に語り聞かすという世界が人物教育の場なんだ。

私は皆さんに教育しているのではない。告白している。証言なんです。証言集会です。止むに止まれずして告白せざるを得ない。自分をぶちまけている。語るも聞くも同じことになって、その気持でもって、

「アーメン！」

と誰かが叫んでもいいくらいなんだ。あなた方はおとなしいね、時々叫んでくださいよ。ここで語っている人がびっくりするように。私たちは語るも聞くも同じこと、キリストの火に燃やされることだけですから。

私は集会をしていると、あとになるほど声も大きくなるし、力が入ってくる。だから私は疲れない。集会が終わると、もの凄いエネルギーが来ている。語りながら、上からエネルギーが来ている。私は無教会にいたときには、無教会の先生方は

「日曜日に集会をすると、あとはもぬけのからみたいになって、月曜日はくたびれてしまう」

なんて言っていた。無教会の集会なんてものはそんなことだった。ごもつともなことを言っていたってだめなんだ、本当の聖霊の世界ではないものだから。翌日くたびれてしまうなんて、そうではない。終りになるほど力がきてしまう。

私が元気なのは、水泳をやっているからではない。これは天来の力のお陰です。「元気」というのは元の気なんだ。神さまからくる気が本当の元気なんだ。自分のつくった元気ではない。

「元気を出せ」

ではない。

「元気を受けとれ」

なんだ。根元の気を、神の根元の気を、キリストの根元の気を受けとる。ギリシア語でもヘブライ語でも、「霊」も「気」も「風」も同じなんだ。だから、

「風の如きものが……」

と書いてある。これは霊なんだ。天来の霊がやってきた。単なる風ではない。そういう烈々たる世界です。

## ●パウロの回身

キリストは、

「我は火を投ぜんために来れり。この火燃えたらんには何をか要せん。我には受くべきバプテスマあり」



と仰った。十字架のことです。

「十字架に架かって、それから聖霊をやるからね」ということです。

「私は十字架に架かって、贖罪の死をとげたら、それから今度はお前たちに聖霊をやるから、祈って待っていていろ」

と。そうしたら、復活して五十日目に聖霊が臨んできて、みんなひっくり返ってしまった。パウロはダマスコ途上でひっくり返された。あれでパウロがパウロに本当に変わってしまった。あれがパウロの「回身」です。ただ心ではない。身というのは全存在です。パウロは全存在がひっくり返された。

「わが目より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と。あれがパウロの回身なんだ。回心ではなく回身です。ただ心の問題ではない。全存在の問題なんだ。

あなた方一人一人は烈々たる人に大いになってください。あなた方一人一人が伝道者です。道を伝える者です。伝道者というのは、特別な人が伝道者ではない。一人一人が伝道者なんだ。道を伝えなかつたら、キリストを受けとっていることにならない。人に何と思われようと、何と言われようと構やしない。言うべきときにははっきり言う。

「人に聞くよりも神に聞くことが大事ではないか」

とキリストも言っておられる。

### ●キリストと一つになる

楽しいね、今日の京都の集会は。皆さんは黙っているけれども、胸の中では

「然り、アーメン！」

と叫んでいる。そうでしょ。

祈るといふのは、何かお願いすることではない。キリストに叫びかけること。そして、キリストと一つになる。もう現にいただいているのに、また

「もつとください」

なんて、それは少し欲が深すぎるよ(笑)。本当だよ。いただいているんだから、

「ありがとうございます」

と、キリストに感謝と叫びをあげる。そういうことです。

「先ず、先生の話聞いて、それからゆっくりお願いします」

なんてことではひとつもない。聞きながら、あなた方はもう受けとってしまった。祈り入ることです、入らなくて。

旧約で「詩篇」といふのは、この訳はまちがいで、これは「讚美歌」なんだ。「テヒリーム」とは讚美歌という言葉なんです。



そういうわけで、京都召団は燃えてしょうがないということに、大いになってください。「われ火を投ぜんために来れり」

という、キリストのあの聖言を空しくしたらしょうがないものな。

「キリストさま、火が燃えました。私は火になりました」

と、聖書にそう書いておくといい。読んでいるばかりでなく、横に書いておくといい。それが本当の聖書の読み方なんだ。

「パウロさん、あなたは少しまだるっこいよ、もっと簡単に言ってくださいよ」

と。ヨハネの方が簡単だからね。パウロは三段構え的なものの言い方をするけれども、ヨハネは一段です。ヨハネは率直なんです。

## ●キリストの捨身の愛

コリント前書の13章に、

「1たとい我もろもろの国人の言および御使の言を語るとも、愛なくば鳴る鐘や響く鏡鉢の如し。2仮令われ預言する能力あり、又すべての奥義と凡ての知識とに達し、また山を移すほどの大なる信仰ありとも、愛なくば数うるに足らず。3たとい我わが財産をことごとく施し、又わが体を焼かるる為に付すとも、愛なくば我に益なし。4愛は寛容にして慈悲あり。愛は妬まず、愛は誇らず、驕らず、5非礼を行わず、己の利を求めず、憤おらず、人の悪を念わず、6不義を喜ばずして、真理の喜ぶところを喜び、7凡そ事忍び、おおよそ事信じ、おおよそ事耐うるなり。8愛は長久までも絶ゆることなし。然れど預言は廃れ、異言は止み、知識もまた廃らん。9それ我らの知るところ全からず、我らの預言も全からず、10全き者の来らん時は全からぬもの廃らん。11われ童子の時は語ることも童子のごとく、思うことも童子の如く、論ずる事も童子の如くなりしが、人と成りては童子のことを棄てたり。12今われらは鏡をもて見るごとく見るところ朧なり。然れど、かの時には我が知られたる如く見ん。今わが知るところ全からず、然れど、かの時には我が知られたる如く全く知るべし。13げに信仰と希望と愛と此の三つの者は限りなく存らん、而して其のうち最も大なるは愛なり。」(コリント前13・1～13)

とある。ここところは素晴らしい。これはみなキリストの愛です、キリストからくる愛、捨身の愛です。愛というのは捨身の愛です。キリストの愛は捨身の愛だから。永遠の生命をくださった愛だから。贖罪とその後から永遠の生命をくださった。これは大変な方です。我々は死んでも死なない。烈々たる存在にされている。

「元氣を出せ」

ではない、



「元氣を受けとれ」

ということですよ。キリストの元氣を、元なる靈氣を受けとる。

●靈の力が人に伝わる

こういうキリスト者が一体幾人いるだろうね。あなた方はその大事な、キリストが喜びたもうところの——人が喜ぶのではない、

「われ汝をよろこぶ」

という、

「人に捨てられても、われは汝を捨てない」

という——そういう存在にあなた方一人一人がなる。そうしたら、楽しいし力が来てしようがない。本当ですよ。だから、私もひとつも寂しくない。

「人はすつれど、君は捨てず」

という讚美歌があるでしょ、あれだよな。あなた方一人一人の告白が、

「何とでも扱ってください、キリストは私を捨てませんから」

という告白になる。もうこれは勝っている。

「われ既に世に勝てり」

という。そういう勇ましいキリスト者です。勇ましいキリスト者は隣人を誰でも、本当に困っている人、病める人、悲しんでいる人を、その喜びの世界に、力の世界に、生命の世界に入らしめる。キリストの生命を与える。それが本当のキリスト者なんだ。いわゆる

「信仰」

なんてものはいらん。キリストに圧倒されていけばいい。キリストに圧倒されて、その圧倒されている力をまわりに与えていけばいい。その力が来て、相手に手をおくと、その靈の力がその人に伝わる。「あんしゅ按手」とはそのことです。

「ちよつと身体の調子が悪いと思ったら、按手されたら治ってしまった」

と。そういった靈の力が来ていないで、いい加減に按手なんかしたらだめなんです。医者いしやの薬よりもキリストの靈の力の方が凄いですから、問題ないです。疑ったらだめですよ。疑いというのはだめなんだ。相手が、

「そうなるだろうか」

ではだめだ、

「キリストさま、あなたの聖力にあずかります」

と言って無条件に受けとらないと。その時にもう既に治ってしまっている。ある人が病氣びやうきしていたときに、キリストが、

「既に癒えたり」

と言った。その人のことを聞いたキリストが「既に癒えたり」と言ったその瞬間に、もう



その人は治ってしまっている。大変なひとだ、イエスというのは。

「ラザロよ、起きよ」

と言えば、死人のラザロが起き上がってきた。死人を甦えらせてしまった。とにかく、皆さん、

「キリストは大変なひとだ、ありがたくてしようがない、それを証しせざるを得ない」

と言つて、キリストに驚嘆しながら、キリストに捕まえられて進んでくださいよ。

あなた方、聖書は何の訳で読んでいるかい。口語訳はだめだよ、文語訳でないと。私はいずれそのうちに、文語主体の——口語も多少混じっているけれども——文語主体の新約聖書を作りたいと思つていくくらいです。

「よらば良き道を示さん」

ではない。

「道を示すぞ」

ということ。文語でもなお弱い。私ははっきり、現在形で文法を超越して訳してやるから。

「小池というやつは勝手な訳をしている」

なんて言われるかもしれない。訳ではない。その奥の世界をつかまえて、ものを言っているんです。それくらいのことをしようと思つています。キリストが歎びたもうことをすれば、人に何と言われようと一向に構わない。キリストによるこぼれる人になれば、人はどう批評されようが、そんなことはどうでもいい。

「やつぱり、あの人は本ものだった」

と、後から分かる。

コリント前書13章というのは短いけれども、素晴らしいところだ。

「最も大なるは愛なり」

という。これが全くキリストの聖霊の愛です。

### ●神のわざに読みながら与かる

使徒行伝にもどります。

22 イスラエルの人々よ、これらの言を聴け。ナザレのイエスは、汝らの知るごとく、神かれによりて汝らの中に行い給いし能力ある業と不思議と徴をもて汝らに証し給える人なり。23 この人は神の定め給いし御旨と、預じめ知り給う所とによりて付されしが、汝ら不法の人の手をもて釘磔にして殺せり。

24 然れど神は死の苦難を解きて之を甦えらせ給えり。

三日目に甦った。

彼は死に繋れおるべき者ならざりしなり。



死につばなしの人ではないんだと。

25 ダビデ彼につきて言う「われ常に我が前に主を見たり、我が動かされぬ為に我が右に在せばなり。26 この故に我が心は樂しみ、我が舌は喜べり、且わが肉体もまた望の中に宿らん。27 汝わが靈魂を黄泉に棄て置かず、汝の聖者の朽果つることを許し給わざればなり。28 汝は生命の道を我に示し給えり、御顔の前にて我に歡喜を満たし給わん」29 兄弟たちよ、先祖ダビデに就きて、我ははばからず汝らに言うを得べし、彼は死にて葬られ、其の墓は今日に至るまで我らの中にあり。30 即ち彼は預言者にして、己の身より出づる者をおのれの座位に坐せしむることを、誓をもて神の約し給いしを知り、31 先見して、キリストの復活に就きて語り、その黄泉に棄て置かれず、その肉体の朽果てぬことを言えるなり。32 神はこのイエスを甦えらせ給えり、我らは皆その証人なり。33 イエスは神の右に挙げられ、約束の聖霊を父より受けて汝らの見聞する此のものを注ぎ給いしなり。34 それダビデは天に昇りしことなし、然れど自ら言う「主わが主に言い給う、35 我なんじの敵を汝の足台となすまでは、わが右に坐せよ」と。36 然ればイスラエルの全家は確と知るべきなり。汝らが十字架に釘けし此のイエスを、神は立てて主となし、キリストとなし給えり』

「キリスト」というのは「聖霊の油を注がれたる者」ということです。こここの所はずつと読むと凄いな。

37 人々これを聞きて心を刺され、ペテロと他の使徒たちに言う『兄弟たちよ、我ら何をなすべきか』38 ペテロ答う『なんじら悔改めて、おのおの罪の赦を得んためにイエス・キリストの名によりてバプテスマを受けよ、然らば聖霊の賜物を受けん。』

聖霊という「賜物」です。

39 この約束は汝らと汝らの子らと凡ての遠き者、即ち主なる我らの神の召し給う者と共に属くなり』40 この他なお多くの言をもて証し、かつ勸めて『この曲れる代より救い出されよ』と言えり。41 斯てペテロの言を聴納れし者はバプテスマを受く。この日、弟子に加わりたる者、おおよそ三千人なり。42 彼らは使徒たちの教を受け、交際をなし、パンを擘き祈禱をなすことを只管つとむ。

43 ここに人みな敬畏を生じ、多くの不思議と徴とは使徒たちに由りて行われたり。

非常に素晴らしい現実が書かれている。第3章にも

1 昼の三時、いのりの時にペテロとヨハネと宮に上りしが、2 ここに生まれ



ながらの跛者<sup>あしなえ</sup>かかれて来る。宮に入る人より施濟<sup>ほどこし</sup>を乞うために日々宮の美麗<sup>うつくし</sup>という門に置かるるなり。<sup>3</sup>ペテロとヨハネとの宮に入らんとするを見て施濟を乞いたれば、<sup>4</sup>ペテロ、ヨハネと共に目を注<sup>と</sup>めて『我らを見よ』<sup>と</sup>言う。<sup>5</sup>かれ何をか受くるならんと、彼らを見つめたるに、<sup>6</sup>ペテロ言う『金銀は我になし、然れど我に有るものを汝に与う、ナザレのイエス・キリストの名によりて歩め』

そう言つたら、あしなえが歩みだした。治つてしまった。

<sup>7</sup>すなわち右の手を執りて起こしに、足の甲と踝骨<sup>くるぶし</sup>とたちどころに強くなりて、<sup>8</sup>躍り立ち、歩み出して、且あゆみ且おどり、神を讚美しつつ彼らと共に宮に入れり。<sup>9</sup>民みなその歩み、また神を讚美するを見て、<sup>10</sup>彼が前に乞食にて宮の美麗門に坐しいたるを知れば、この起こりし事に就きて驚駭<sup>おどろき</sup>と奇異<sup>あやしみ</sup>とに充ちたり。

<sup>11</sup>斯て彼がペテロとヨハネとに取りすがり居るほどに、民みな甚だしく驚きてソロモンの廊と称うる廊に馳<sup>は</sup>せつどう。<sup>12</sup>ペテロこれを見て民に答う『イスラエルの人々よ、何ぞ此の事を怪しむか、何ぞ我らが己の能力<sup>ちから</sup>と敬虔<sup>けいけん</sup>とによりて此の人を歩ませしごとく、我らを見つむるか。

「我々の信仰とか、そんなことではないんだ」と。

<sup>13</sup>アブラハム、イサク、ヤコブの神、われらの先祖の神は、その僕イエスに栄光をあらしめ給えり。

「キリストの力でできたんだぞ」ということです。

汝等このイエスを付<sup>わた</sup>し、ピラトの之を釋<sup>ゆる</sup>さんと定めしを、其の前にて呑みたり。

<sup>14</sup>汝らは、この聖者・義人を呑みて、殺人者<sup>ひとごころし</sup>を釋<sup>ゆる</sup>さんことを求め、<sup>15</sup>生命の君を殺したれど、神はこれを死人の中より甦<sup>よみが</sup>えらせ給えり、我らは其の証人なり。

非常に劇的な事態がここに書いてある。

聖書というのは、ただ読む本ではない。その現実<sup>現実</sup>に自分を入れていく本なんです。意味ではない。神のわざに、読みながら与かることです。原動力なんです。そういう烈々たる力をもたなければ、キリスト者とはいえない。男でも女でも。

ジャンヌダルクなんていうのは、田舎の乙女だけれども、イギリスの軍隊に対してあれだけの戦いをした。なにも戦いがいいというのではないけれども。やはり上から来ている霊的な力ですね。どうぞ、お一人一人が、キリストが歎びたもうところの、

「われ汝をよろこぶ。われ汝を選<sup>えら</sup>びたり」

という御声を聞く、存在といよいよなつていただきたいと思います。

では、あとは祈りましょう。

